なつやすみの宿題

黒野　ている

7月25日　Not sweet rum

お前　好きなの飲みな

俺は　安いラムの1本もありゃ　それでいいさ

白でなくて　ダーク

それにな　角砂糖をくれ

なければ普通のでいい

たっぷり　くれ

めずらしいな　お前から声かけてくるなんて

なんでって・・・

これ角砂糖にしみこませてな

火いつけるんだ

ほら

これオイルライターでやっちゃダメだぜ

カッコばっかでな

オイルの匂いでダメになっちまうだろ

アルコールランプがありゃ

理想だろうな

あったまったところで

こっちのラムにいれる

ほんのり酒があったまるだろ？

これくらいの香りが

いちばんいいんだ

ラムは甘くするに限る

うん　どうした

人生相談なら

のらねえぞ

7月31日　夢

月の光が見えたら

夜空の下で逢おう

僕たちは黒いから

誰にも見つかりっこない

あなたに逢えるまで

どんどん透明になっていく　こころ

ノーブルな会話

スマートな演出で

あなたの喜ぶ顔を

想像してみる

なのに

逢ったとたん

いじわるな仕草に変わり

なんどか　あなたを

おこらせたけど

僕たちは離れていられないから

月が昇れば

また　あの場所に

夜さえも寝静まった

あの凍った時間に

また　逢える

そのときまで

僕のこころは透明になっては

波のように揺らぐ

あなたのこころは

穏やかですか

また逢おうと

思ってくれますか

8月1日　黒い流星

僕がまだ幼い頃の話をしよう

こんな月の青い夜だよ

うるさいやつらに追っかけられて
いつもの道を大きくはずれて
来たことのない畑を歩いていたときのこと・・・

いま帰っても　あいつらは待ち伏せているだろう
今晩　ここいらで過ごそうとあたりを探っていた

『おい　若ぇの』
と　どこかから声がした

足をとめると
木の上から　大きな黒猫が見下ろしていた

『初めて見る顔だな　どこから来た』

目が慣れると　顔じゅう傷痕で
どこが目なのかもわからない
「みえるの？」
つい　聞いてしまった

黒猫はそれに答えず
『ここらは　危ねぇとこだ　迷い込んだのなら見つからないうちに帰んな』

「おっかけられてきたから・・・どこへ帰ればいいのか」

黒猫はうっすらと目を開けた
『・・・知ったこっちゃ　ねぇよ』

そこだけ金色の光を集めた

刃物のように鋭い目だ

『てめえの明日は　てめえで考えな』

わかってるさ　言われなくたって

『だけどな』
黒猫はため息をつく
『腐った鼠には　手を出すなよ』

「くさったねずみ？そんなもの　誰が手を出すものか！」

『泥かぶって生きようが　いちばん憎いヤツに踏みつけられようが
そんなこたぁ　どうでもいいことなんだよ
だけどな
腐ったようなこと考えてる奴にぁ　間違っても近づくな

そんな奴が命乞いしてきても、どんな甘ったるいこと言ってきても
絶対に　喰いつくんじゃねえぞ

そいつに喰いついた奴ぁ・・・』

また　ため息をつく
『どっか　消えちまうんだよ』

「くさったようなことって　どういうことなの？」

黒猫は音もなく伸び上がると

ひと声　うなった

『もう　お前は行け。ここは　オレの縄張りだ。
オレの世界なんだよ。
お前はお前の世界で』

黒猫は驚くほど速く木を駆け下り、走り去った

去り際に僕の耳には黒猫の声が

『生きろ』と

唸ったように思えた

8月7日　麦秋

金色の野原に 風が舞う

風は きみの思いを乗せて 西へと吹く

「だめだよ、ぼくには翼がないんだもの」

ほんとうは きみには翼があるのに ぼくは気づかぬふりをした

風はいつまでも 優しく吹き渡り 夏の香りを連れてくる

ある朝 目を覚ますと きみはもういない

ひとひらの羽根を残して あの空の向こうへと

残されたぼくは いつしか一条の麦となり なにもかも夕陽に晒されて そこに立ち尽くす

風はいつものように 甘く優しく ときにはかすかな痛みをもって ぼくのまわりを通り抜ける

8月11日　エリーさんの羊

「もーう、何でなのよぉ。」
エリー、仕方ないよ。今日は諦めて。
「諦めるって、なにを？あたしよりもお客の方が大事なの？あなた、あたしのことなんかちっとも見てないじゃないの！」
そういうわけじゃないんだ。これは…
「言い訳なんかいらない。帰る。」

さよなら、と音を立てて　ドアは締まる。

エリーの後姿が消えると、僕はまた作業に取りかかる。
「見てない、か。」

休みのはずの日に予約が入る。 エリーと海へ行く約束もあった。 だが、僕は仕事を選んだ。
予約は１２時から。 覚えのあるお客だ。いつも彼女と二人で来て、ゆっくりくつろいでゆく。
好みの素材も それにあう飲物も テーブルのセッティングも 好きなものはすべて覚えている。 そうだ エリーのことよりも・・・ 僕の視線は常にもっと先に向いていて 手元はおろそかなのかもしれない。

エリーの出て行ったドアが開き、お客が到着する。
シャンパンを、といわれて、最初の一本は繊細な舌触りのランソンをお出しする。 そして、今日の素材と調理法を話し合う。
彼女は　色とりどりの野菜をあしらった石鯛に、ライムとミントのジュレ。 彼は　ブレス産鶏を軽くスモークして、掘りたての香りの濃いじゃがいものガレットを添えて。
それぞれに前菜とデザートを。
普段ならもう少しどっしりした味のものを選ばれるはずなのに、今日は暑いからか。

定休日だから貸切だ。
他にお客はいない。 会話も耳に入るが、どうもいつもと違う気がする。

メインの料理の前に、もう一本シャンパンを。 それも珍しい選択。
僕は、料理に負けないヴーヴ・クリコを用意する。
グラスを取り替えると、彼女が話し出す。

「今日は　なぜシャンパンなの？お昼から贅沢ね。」
「うん。今日は記念日なんだよ。」
「何を言ってるの？パリ祭なら終わったじゃないの。あんなに賑やかにパレードしてたじゃない。」
見てなかったのね、と彼女は笑う。

この言葉に反応したのは、この店で僕だけだろう。 記念日だとは聞いていなかった。
なにか用意すべきだっただろうか。 彼の顔をうかがう。

「さあ、どうなるか わからないからね。」

僕になんの指示もなく、彼は新しいグラスを傾ける。 それ以上　こちらも聞くわけにいかない。
僕はテーブルを離れ、料理の支度をしなければいけなかった。
もし記念日なら、デザートに華を持たせるのが一番いいだろう。休みの日なので余分に材料があるわけではないが。
背の高いグラスから立ち上る細かい泡。 その向こうの彼女は、表情が硬い。

料理を置くと、説明する間もなく彼女が話を続ける。
僕は聞くとはなしに、カウンター越しに様子をうかがう。

「・・・そのために仕事を蹴るつもりなの？」
「秤にかけるわけじゃないけど、ドバイの支社に行けばきみと一緒になるわけにはいかないだろう。」
「そんな大きな仕事を断ったら、あなたに未来はないわよ。」
「構わない。」
「構わない、って・・・」

彼女はナイフとフォークを音をたてて皿に置く。 彼は続ける。
「もっと小さな会社を捜す。いまのように世界を転々とするんじゃなく。 小さくてもきみと落ち着いた家庭を持ちたい。」
「私はそんなあなたと一緒にいたいわけじゃないわ。」

しばらく間があって、彼が冷静に言う。

「僕よりも会社の名前が大事だったのか。 大企業の社員だから、ドバイの支社に行けば聞こえがいいから、きみはそれが狙いだったのか？」

彼女の顔から表情が消える。 最悪のパターンではある。 違う意味の記念日になりはしないかと気が気でない。

「きみに苦労をかけたくない。」

彼女は化粧室に立った。僕は　皿を下げに行く。
「聞こえましたか。」と彼は僕を仰ぐ。
「少し、ですけど。」と答える。
「彼女にプロポーズしました。きっと喜んでくれると思っていた。だけど、どうも思惑が違ったようです。」

彼は続ける。
「彼女があんな人だとは思わなかった。肩書きや世間体だけで僕を選んでいたなんて・・・」

僕は　エリーを思い出していた。 彼女ならなんと言うだろうか・・・ 予定をキャンセルしてまで仕事を選んだ僕を許してくれるだろうか？
ただ　わかっていることはひとつ、エリーは僕の肩書きや世間体で僕をえらんではいないということだ。

「そうではないと思います。」
彼は驚いた顔で僕を見る。
お皿を下げ、デザートのセッティングをしながら、僕は言った。

「仕事を一生懸命にがんばっているあなたに魅力を感じているんじゃないですか？」
「仕事を？でもこれから国外へ行くことを考えたら、いろんな意味で無理がでます。 その無理は彼女にかかってしまう。 たとえ少し収入が減っても、家庭が安定しているほうが幸せでしょう。 そうでないとしたら・・・最初から結婚の話はなかったということで終わります。」

「僕は・・・」
僕が、休みの決まった仕事に変わると言ったら、エリーはどう答えるだろう。
何の未練もなく、この仕事をやめると言ったら。
僕のなかのエリーが答える。

「僕は 仕事に燃えていて、チャンスをつかんで、そのうえでついて来てほしいと。 そう言われたかったんじゃないかと思います。」
「何もかもは無理でしょう。」
「最初に無理だと決めてしまうのは、早いんじゃないですか？ 彼女がお荷物だと言っているよう

なものです。 そうじゃないですよね。彼女はあなたを支える人ではないのですか？ 結婚は足かせではなく、力をあわせたから出来ることが広がる。 そこに価値があるんじゃないですか？」

彼は少しの間、悔しそうな顔をしていたが、
「そうですね。彼女には彼女の考えがある。 僕の一方的な思いを押しつけてしまったみたいです。 彼女の考えも聞かなければ。」

考えることがたくさんあって、気が回らなかった、と小さな声で言った。
そして、
「シェフ、彼女が戻ったらデザートをお願いします。もう一度、話し合います。」
と僕に笑いかける。

しばらくデザートの用意をしているうちに、彼女は席に戻ったようだった。 僕は話し合いの終わる頃を見計らって、出来たてのデザートにカバーをかぶせてワゴンで運ぶ。

「何にしようか迷いましたが、結局 僕の一番好きなデザートに決めました。」

多くを語らず、二人の間にカバーごと皿を置く。
カバーを開けると、小さなココットに熱々のスフレがほっこりと姿を表す。 その横にはスフレの熱で溶けかけているオレンジのリキュールの効いたアイスクリームが。

「スフレの真ん中を崩して、そのアイスクリームを落としてください。 デザートは、わざとこの分量です。 二人で一人前、ゆっくりお召し上がりください。」

二人は不思議そうな顔をしていたが、熱烈なオレンジの香りにつられ、スプーンを手にした。
音もなく表面が割られ、思わぬほどの湯気が立ちのぼる。 溶けかけの艶やかなアイスクリームがソースのように注がれる。 軽やかに膨れあがっていたグランマニエのスフレは、みるみるうちに形を変えていく。
小さなココットなので、顔を寄せ合うようにその光景を見ている二人。
うまくいったかな、と僕は独り言をいう。

夕方、片付けをしていると、ドアが開いた気配がした。さっき鍵を締めるのを忘れていた。 今日は休みだと断るつもりで入り口を見ると、そこにいたのはエリーだった。
「べつに謝ってほしくてきたわけじゃないから。」

「えっ？」

意味がわからず立ち止まる僕の横をすり抜け、
「片付けを手伝おうかなって。」
言うが早いか、もう洗い物のシンクに向かっていった。

「ねえ、エリー。」
「なによ、聞かないわよ。」
「レストランの語源の一つに、restore(レストア・リストア)って言葉があるんだ。 壊れたものを修復する、というような意味なんだけど、今日は本当にその通りだったよ。 一時は駄目になりそうな二人だったけど、なんとか仲直りしたんだ。 きっとプロポーズもうまくいったはずだよ。 この仕事をしていて、こういう瞬間が一番楽しい。 お腹を満たすだけじゃない。精神的にも満たされる場所なんだよな。」

エリーは黙って洗い物を片付けていた。 僕は続けた。
「もし僕がこの仕事を辞めるっていったら… きっちり休みの決まっている仕事に変わるといったら、エリーはどう思う？」

しばらく沈黙のあと、エリーはこう言った。
「そんなヘタレなんかにかまってられないわよ。さあ、どいて！床も掃除するから！」

こんなにメレンゲを飛ばして、一体何を作ったの、と文句を言いながら、エリーは床に水を撒く。
その背中に 僕は言う。
「仲直りのデザートをね。」

8月21日　月のしずく

燃えるように赤い月のしずくは

空から降りて

地上に跳ねて

赤いうさぎになりました

凍るように青い星は

ひとつ またひとつと

ぱちんとはじけて　河に下り

青い魚になりました

そうしてすべてを失った黒い夜空は

自分の身を削って

黒いネコを作りました

クロネコは

たまにお空へ帰りたくなって

何度も頭上を見上げるのですが

一度も 帰って来いと言われたことはありません

ある日 くわえたさかなにたずねました

なあ おまえはいちどでも空へもどりたいと思ったか？

さかなはいいました

そんなこと考えたこともないよ

だって この世界は自由で楽しいんだぜ

クロネコは礼を言ってさかなを食べました

自由ってなんだろう？

現におまえは 空にあれば私などに食われることなどなかったのに

クロネコは赤いうさぎを捕まえききました

なあ おまえは空に帰ろうと思ったことはあるか

クロネコにくわえられ、息も絶え絶えなうさぎは言いました

とんでもない

こんな素晴らしいところにいられて幸せだよ

空に戻ろうなんて思わないさ

私に食われてでも この世のほうが幸せだというのか

なぜ　私は空へ帰りたいのだろう

生きたくもない、死にたくもない

そんな間で何を求めているのだろう？

闇夜に考える

月もなく 星もいない空に

私がいる価値はあるのだろうか

空はもう昔の空でなく

私も昔の私ではない

何を見て　何を聞いて　何を思う・・・

だれもいない空間でひとり天体を飾るには　志が足りず

下界に降りては　共につどう喜びも知らず

ただ黒く　この世をすり抜けるのみ

クロネコの血となり肉となった　さかなとうさぎは言いました

姿あるもの　形をかえて　またつぎを生くるべく・・・

思うよりも　今のおまえを支えている私たちのために生きろ

おまえのためにではなく

次におまえが食われるであろうもののためにも生きろ

時間は過ぎるのみ　もとには戻らない

おまえに喜んで食べられたのだということを　忘れるな

生きるとは 次につなげること

次に生かされるのなら

自分の死さえ生に置き換わる

どれだけ生きたのか

どれほどの生を生かすことができたのか

決して無駄にはしてはならぬ

決して無駄にはならぬ

クロネコのからだのなかで

ちいさな　さかなとうさぎは

また夜空の星と月のように

輝きはじめました

8月31日　雪

新月の深夜

ノックするのはあなたの窓

寒いから早くおはいり、と

あなたは湯気のたつカップを差し出す

温かいワインを舐めていると

あなたは私を抱き上げて

冷えきった背中をなでる

「どこへいってたの？こんなに寒いのに」

私はそれを振りきって暖かい毛布に潜り込む

今夜はここにいるけれど

明日のことなんて約束できない

月が出れば 私は夜に帰る

それで良ければ また新月の闇に

あなたの窓でお逢いしましょう

南半球の8月の夜の夢

9月1日　赤い月

空に月

月に森

森に影

ほおずき

鬼灯

頬付き

鳴らしてみて、と ひとつ

赤いぼんぼりが手のひらにのる

何度も頬を膨らませてみるが

思うような音は出ない

ひとつ またひとつと

哀れなほおずきは地面に放たれる

見かねた君が

こうするのよ、と音を鳴らして見せる

低い音が震える

聞こえないよ、もう一回

君の唇が近づいてくるのを

頬が体温で感じとる

音を鳴らしかけて、

聴こえてるんでしょう

と ほおずきを含んだまま 耳元で君は笑う

風は月の上の雲を掃き散らす

盛夏を越え、次の季節の匂いが僕たちを待っている

過ぎ去った季節はどこへ行くのか知っているかい？

僕は君にたずねる

あなたとの距離を埋めにいくのにきまってるじゃないの

ほおずきを鳴らすのをやめた君が答える

西の空に沈んでゆく月は

君のほおずきのように 紅く紅く

飛び遅れた渡り鳥が

僕と君との間にある いくつもの星を

縫うように つないでいった

なつやすみの宿題

http://p.booklog.jp/book/100740

著者：黒野　ている
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/naomur/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/100740

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/100740

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ